市制運動は最終段階に

カギは国会提案の時期

豊栄町が人口三万人以上の町で組織した全国新市制実現期成会（加入三十一町、会長三重県久居町野垣内三郎町長）に加入し、市制施行を目ざして運動を始めたことは、本紙七月号でお知らせしました。その後、一般のみなさんから、「市制への動きは、どうなっているのか。」というおたずねを大分いただいていますので、「市制へのその後の動き」を再びとりあげてみました。

まず、期成会の動きとしては七月から十月までの間に東京都を会場地として、総会や役員会などの会合を四回ほど開いています。これらの会合には、町からも、町長や議会議長が出席しています。

これらの会合で、決定されたおもなものとしては、期成会に加入している全町と、その関係地域（都道府県ごと）選出の国会議員全員の署名を得て、十二月中旬に開会予定の通常国会に、議員立法で法案を提出してもらうよう国会の地方行政委員会などへ請願をしたこと。国会議員で構成する新市制実現世話人会が結成され、その役員として、会長に岸信介（元首相）、副会長四人に福田篤泰（元国務相）、篠田弘作（元自治相）、松田竹千代（元文相・郵政相）、吉武恵一の有力な方々から、それぞれ引受けていただいたこと。三林町長が、北海道の高田忠雄登別町長らと、期成会の副会長に選ばれたことなどです。

一方、これらの期成会の動きに対する各政党の反応を観測しますと、社会党は、趣旨に賛成する（成田委員長談）としており、公明党は、おおむね賛成してもらえる見込みということですが、第一党である自民党では、自治省出身で地方自治のベテランである国会議員たちが反対しており、その理由として「今後の地方自治は、広域行政の方向で対処しなければならないようななりゆきになっている。このようなときに小規模の行政単位を特例として認めることは、時代に逆行するものだ。」とする論が、小数ながら党内の正論としてうちだされている実情にあるようです。

したがって、結論的には、自民党内に反対の空気があり、特例法案が法理論として疑義があって、今の情勢のまま単独で提案された場合は、成立する見通しがつかないと見られていますが、反面、この法案は、事業執行など異なり、成立しても国の予算を必要としない有利な点もありますので、他の地方自治法関係の改正法案と同時に提出されることにより、成立する可能性もあるものと見られます。

すでに、衆議院法制局では法案の準備を終っているようすなので、この法案の成否は、提案する時期の選びかたが、今後に残された重要な課題になっているものといえましょう。

期成会に加入している人口三万人以上の町は、全国で三十一町ですが、新潟県では、南魚沼郡の塩沢町と六日町の合併の動きがあるようなので、特例法が成立したと仮定して、その有効期間内に、両町の合併が実現したときは、合併後の人口が四万九千六百十一人（昭和四十年国勢調査人口）となりますので、新潟県を含めた東北七県からは、豊栄町のほか、もう一つの市が生まれることになります。

長場の大沼清衛さん（三七歳）の一家が、八郎潟の中央干拓地へ入植することになりました。大沼さんは、八郎潟の訓練所で、一年間の訓練を受けるため、十一月十二日、単身で出発しました。出発に先だち、町の産業教育振興会では大沼さんの壮行会を青年研修所で開きました。（写真は、壮行会であいさつをする大沼さん夫妻）

県の功労表彰に三人

町の三人が、一月十三日、県知事から表彰されました。これは、教育や産業、県政などに功労のあった人を、毎年表彰するものです。

○護山孝寿さん（六七歳大迎）　教育文化功労者

護山さんは、浄応寺の住職のかたわら、大正五年ころから青少年教育に献身されました。昭和六年、私費で保育園を開設、この事業に三十六年間打ち込み、また地域子ども会、少年団を結成、指導者となり、地域、郡、県の青年活動に尽力されました。また、ボーイスカウト北蒲原郡第一隊、ガールスカウト新潟第二団を結成、育成指導にあたられ、名利を求めず、一貫して青少年の保護育成に献身されました。

○中川精治さん（六十七歳上大口）　産業功労者

中川さんは、昭和二十年五月、葛塚町商工会長に就任、その後二十三年間にわたって地域の商工業発展に尽力されました。また、昨年の十二月県商工連合会長に就任、県連の中心となり、県内中小企業の振興と、産業の発展に尽力されました。

○後藤清一さん（六十歳内島見）　県政功労者

後藤さんは、昭和三十四年四月、県議会議員に初当選、現在三期めの県議会議員をつとめておられます。県議会では、三十四年以来産業経済委員をつとめ、特に七・一七水害にさいしては、災害対策特別委員会の副委員長をつとめ、災害処理に活躍されるなど、県政に対して功労がありました。

人事異動

統計調査事務の取り扱いが総務課から、商工開発課へ移りました。十月に役場機構の一部が変ったことに伴うものです。このため、町職員の一部に異動がありました。

異動（十一月一日付け）

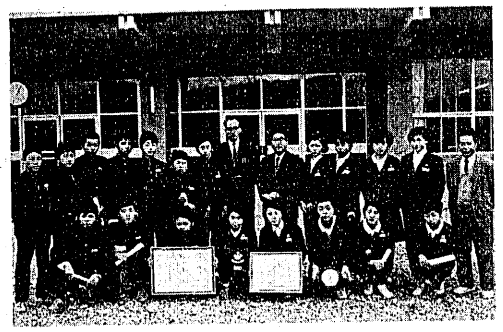
商工開発課

統計係長兼務渡辺知徳、主事宮島勝彦

「福島潟の生物」に優秀賞

― 葛塚中学校生物クラブ ―

葛塚中学校生物クラブが、調査、研究した「福島潟の生物」が、読売新聞社主催・全日本学生科学賞の「優秀賞」を獲得し、十一月十日、県庁で表彰されました。



福島潟は、県下最大の潟湖であって、豊栄町一帯は、福島潟から生まれ、福島潟と共に歩んできたと言っても、過言ではありません。葛塚中学校の生物クラブは、この福島潟の大半がやがて干拓されるのに注目、今のうちに、福島潟の自然の姿を記録にとどめようと、クラブ担任の阿部利夫先生指導のもとで、四十一年の秋、調査、研究を開始しました。

調査は福島潟の水質・水流・土壌・植物・魚類・鳥類・昆虫・プランクトンなどについて、その種類や分布、水質と生物の有機的なつながりなどについて、科学的に綿密に行なわれており、その標本、剥製、スライドなどは、おびただしい数に及んでいます。

調査の結果、福島潟の生物は、植物三百四十三種、魚類三十七種、鳥類百三十種、昆虫八十七種、陸生動物三十一種が、観測されたとのことです。このうち非常にめずらしい生物として、植物ではミズタカラシ・オオトリゲモ・ツルスゲ・ツルアブラガヤ、鳥類ではコノハズク・アリスイなどが、あげられています。

現在、生物クラブ員は、男女合わせて二十人ほどですが調査は、日曜や夏休みも返上して行なわれ、時にはクラブの卒業生の援助も、求めたとのことです。表彰を受けたことについて、担任の阿部先生は、「生徒たちは、実によくやった。しかし、まだ福島潟のアウトラインをつかんだ程度なので、今後さらに分析しなければならない。」と言っておられました。

（写真は、賞状を囲んだ葛塚中生物クラブ員）

開館した博物館

失なわれていく民具などの民俗資料を収集、陳列する町の博物館が、十一月三日・文化の日に、役場の分館で開館しました。

開館にあたっては、六十人にのぼる方々から、約三百点に及ぶ農具、漁具、生活用具など、貴重な資料を寄贈していただき、係りでは感謝しています。

博物館は誕生したばかりで収集品は、まだまだ、じゅうぶんとは、いえませんが、今後は、収集品に方向をつけ、特徴のある博物館にしたいと係りは言っていました。また美術品など、みなさんの愛蔵品をお借りして、展示会などを開きたいと、言っていました。今後とも、みなさんのご協力をお願いします。

博物館は、日曜・祝日を除いて、毎日展示していますから、自由にご覧ください。ただし、土曜日は正午までです。

（写真は博物館の内部）

純子ちゃん（里飯野）県下一

― 3歳児コンテスト ―

藤田純子ちゃん（里飯野）が、四十三年度秋の赤ちゃんと三歳児コンテストの三歳児の部で、みごと新潟県一となりました。

表彰式は、十月十四日、新潟市の日報ホールで行なわれましたが知事や商社からの、たくさんの賞状や賞品をもらって、純子ちゃんは大喜びでした。

純子ちゃんは、農業を営む保雄さん、サチイさんの二女で、三十九年の十二月生まれです。出生時の体重は三、一五〇㌘で、歩き始めは十二か月め、コンテストを受けた時の体格は、身長一〇一・四糎、体重一九瓩、胸囲五七・五糎でした。この体格は、身長で七・九糎、体重で五・三瓩、胸囲で六・四糎標準を上回るそうです。しかし、純子ちゃんは、県の審査段階では、ずばぬけて大きい体格ではなかったとのことです。結局、身心ともに均衡のとれた純子ちゃんが、栄冠を獲得したことになります。

（純子ちゃんとサチイさん）

純子ちゃんについて、サチイさんは、「小さいとき、よくカゼをひいたが、特別の育て方は、しなかった」と、言っています。しかし、町の保健婦は、「藤田さん一家は、育児に熱心で、ことにサチイさんは、母親講座などに熱心に参加し、一家を挙げて育児を行なった」と、言っていました。

豊栄町で、秋のコンテストに参加した三歳児は、二百七十七人ありましたが、発育不良の子どもは、ほとんどなかったとのことです。しかし、九五％ちかくの子どもが、虫歯を持っており、おばあさんっ子と呼ばれる子どもには、あまえん坊で、独立心のない子どもが目だったそうです。